

ASIRU - アシル -

令和5年7月6日発行 第8号



E B E (Evidence Based Education) 協議会

令和5年(2023年)6月21日(水)に令和5年度第1回E B E協議会を実施しました。本協議会は、小・中・高12年間を一体的に捉えた児童生徒の学力や学習状況等の分析結果を踏まえ、組織的な授業改善や学力向上等に向けた校内体制の整備、具体的な授業改善の方法などに関する説明や協議により、本道の児童生徒に必要な資質・能力の育成に資することを目的としています。

釧路教育局 猪子教育支援課長

説明①「エビデンスに基づく子どもたちの資質・能力の育成に向けた取組」

全国学力・学習状況調査と北海道高等学校学習状況等調査を活用した検証改善サイクルの取組では、例えば、**全国学力・学習状況調査と北海道高等学校学習状況等調査の共通の項目を活用することで、年度末の検証がより確かなものとなるよう取組を進めることが重要です。**

釧路教育局 小川義務教育指導監

説明②「地域全体で推進する学力向上等の取組」

現行の学習指導要領で求められる資質・能力をこれまでの指導で育成を目指すことには**限界があります**。これからの時代を生きる子どもたちのために、児童生徒がどのように学んでいるのかという**学習者の視点を大切にしながら、教職員の指導観の転換を促していくことが大切です。**

北海道弟子屈高等学校 加藤校長

実践発表①「生徒に必要な資質・能力の育成に係る弟子屈高校の取組」

本校の教育活動を**持続可能なものとするためには、地域からの支援なくして実現することができません**。そこで、社会に開かれた教育課程を実現するため、令和5年度から釧路管内の道立高校としては3校目の**コミュニティ・スクール**を導入することにしました。

今後は、**個別最適な学びの提供と生徒の自己実現のための支援**を行います。さらに、生徒の自己適性の理解を促す助言や、進路及び自己実現するための活動について支援を行います。**オール弟子屈で弟子屈の子どもたちの学びを保障する体制を整えつつあります。**

弟子屈町立弟子屈中学校 小林校長

実践発表②「授業改善により児童生徒の学びを保障する「オール弟子屈構想」を目指して」

II 小中高12年連携の課題と構想

課題1: 計画的・意図的な取組として持続させること

課題2: 教員、保護者、児童生徒に対して意欲やねらいの認知徹底

課題3: 配慮が必要な児童生徒への引継ぎ体制と共有を図る研修

構想1: 小中高共通した授業改善の授業モデルの設定「探究的・協働的な学びスタイル」

構想2: 「総合的な学習の時間」を柱に小中高の「ふるさと学習(弟子屈学)」の構築

構想3: 地域人材育成に向けた地域保護者への働きかけと協力

【小中高12年連携の課題と構想】

課題の解決に向けて、**計画的・意図的に職員の異動があっても持続可能な取組とすること**。学校だけではなく**保護者や地域の人材も活用して町全体で支える取組とすること**。配慮が必要な生徒を含め12年間で児童生徒を育成するための体制を構築することに取り組みます。

その実現に向け、柱となるのが**授業改善による「探究的で協働的な学び」の実現と「総合的な学習の時間」**を柱に12年間の「ふるさと学習(地域学)」の**系統的な連携が今後の地元人材育成に大きく貢献するもの**と考えております。

中高一貫連携したPDCAの取組例

全道学力・学習状況調査と北海道高等学校学習状況等調査を活用した検証改善サイクル

PLAN	DO	CHECK
<ul style="list-style-type: none"> ・年度当初に、中高の教員が合同で(専高)の学力調査の結果を分析し、共通の課題等を協議 ・成績と課題を踏まえ、改善策、取組徹底の指標、実務確認の指標を 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校と高等学校のそれぞれの校内研修に共通のテーマを設定 ・中高合同の授業づくり ・協働的な授業 ・授業づくり協議会で検討した授業を各課に 	<ul style="list-style-type: none"> ・【国語・数学の勉強が好きな】と回答する生徒が約半数以上 ・「自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、図の読みかたなどを工夫して発表していた」と回答する生徒が約70%以上

指標は、全国学力調査と北海道学習状況調査の共通項目を活用

地域で児童生徒を育てる意識で、中高の教員が協力して授業づくり

年度末だけでなく、年度途中に授業アンケート等で把握し、取組を改善

【中高一貫連携したPDCAの取組例】

学習者と授業者の視点の往還に係る共通理解

これまで

決められた教室・学年の中で、「一律の内容を」「一律のペースで」「一律に」「受け持ち」学習

これから

多様な学習者や多様な目的を必ずしも受けず、「多様な内容をもと」「多様なペースで」「多様なペースで」「多様なペースで」授業を行う

児童生徒が**思考・判断・表現**できる活動がベース
活用の文脈の中で**資質・能力**が育成される

【学習者と授業者の視点の往還】

10-2 令和5年度の取組

【令和5年度の取組】

アンケートの回答から

- 小学校…日常的に交流している地域において、新たな気づきを共有できた。高校を含め他校種で交流できて有意義であった。
- 中学校…小中連携において、教育課程に係る共通の取組や校種を超えて協議する機会を設定することなどの必要性を感じた。
- 高等学校…小中高の校種間連携を図ることにより、学力向上に向けた取組のサイクルが効果的で迅速なものになると実感した。

12月実施予定の第2回EBE会議では、管内ミドルリーダーを対象に、各種調査結果の活用について説明及び実践発表を行い、各学校におけるエビデンスに基づく子どもたちの資質・能力の育成に向けた改善方策について協議を行う予定です。(担当：主任指導主事 齋 0154-43-9283)